

新資料・佐藤春夫創作ノート（翻刻）

——信州佐久・疎開生活の一端——

河野龍也

新発見の創作ノートについて

このノートは、佐藤春夫が長野県北佐久郡平根村字横根（現佐久市横根）での疎開中に使用したもので、筆者は、平成二二年一月に古書市でこれを入手した（『朝日新聞』平21・9・7、14面に関連記事あり）。今回初めてその全容を公開する新資料である。

旧蔵者・榎澤龍吉は同地出身の詩人で、郷土史研究者。明治三七年平根村の旧庄屋の家に生まれ、立教大学在学中に白鳥省吾の詩誌『地上楽園』の同人となった。宇都宮師団に入営後、満州に渡り関東軍（牡丹江師団・東寧師団）に所属。終戦後はシベリア抑留を経て、昭和二三年佐久に帰郷。同年八月七日、疎開中の春夫と初めて面会した。公職追放中、佐久地方の歴史に関するアドバイザーとして春夫の取材にしばしば同行。春夫の「疎開もの」（「戦国佐久」）「佐久の内裏」「好色燈籠縁起」の成立に大きく関与した人物である。著書に詩集『軍国時代』（昭36・10、大地屋書房）、和訳詩集『懐風藻』（昭47・9、學燈社）、評釈『佐藤春夫詩集 鑑賞佐久の草笛』（昭

49・12、學燈社）などがある。

ノートはB6判（縦183mm×横129mm）。茶色の表紙に横書きで「NOTE BOOK」、裏表紙には「時間表」が刷り込まれている。発行所などの記載はなし。酸性紙だが状態良好。ただし若干の水濡れがある。本体は藍色野紙縦二六行一五枚を二つ折りにし、二か所を針金綴じにしたもの。もとは六〇頁と思われるが、五七・五八頁が切り取られ、残存五八頁のうち三〇頁を使用（ペン書き。一部赤鉛筆）。

内容はほとんどが詩の草稿である。『まゆみ抄』（昭23・11、信修社）所収の「浅間の噴火を見て」「戸隠」「木曾の秋」、『抒情新集』（昭24・6、好学社）所収の「山中望郷曲」「長男歩む（歩む）」「野のうた」の原形と、臨川書店版新全集未収録の詩稿四篇（「歎息」「妖獣」「さまたまのうた」および無題詩）。このうち、「野のうた」は推敲の跡が著しく、五種類の草稿が確認できる。

春夫の疎開生活は昭和二〇年四月二八日（数え五三歳）から。最

後に引き払うのは昭和二六年一〇月一日（五九歳）。戦後は文京区関口町の自宅にも数回戻っている。ノートに見える浅間山噴火（二三頁）は昭和二二年七月六日、戸隠旅行（六・七頁）は同八月、藤村記念館落成式（一七～一九頁）は同十一月五日。また、「山中望郷曲」の原型「四月の郷愁」（二八～三一頁）の冒頭に、（佐久の郡のさすらひに／四たびの春はめぐり來ぬ）と見え、この詩の初出掲載が昭和二三年四月の『令女界』である所から、（四たびの春）は昭和二〇年到着時の春をも含む四度目の意味になる。ノート後半、二条河原落書になぞらえた無題詩（四八頁）は、臨川全集三六卷二六二頁の佐々木英之助宛て書簡（昭23・9・20）に見える歌謡曲詞「日が暮れる」の内容に近い。これらのことから、このノートは昭和二二年夏からほぼ一年間、断続的に使用されていたと推定される。

参考文献

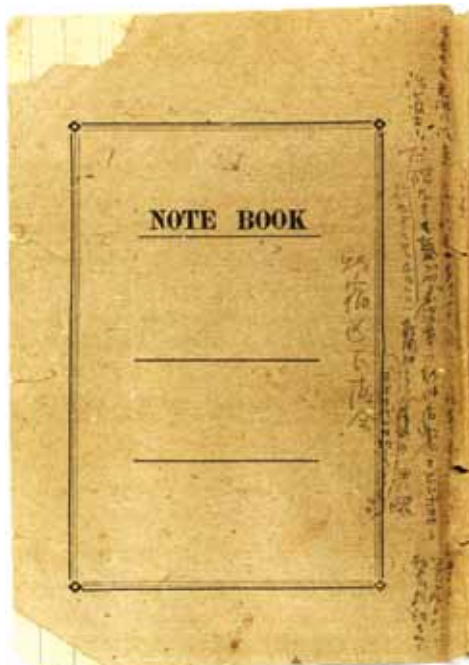
年譜記事は『定本佐藤春夫全集』別巻1（平13・8、臨川書店）の「年譜・著作年表」に拠った。糊澤龍吉の経歴は『軍国時代』（昭36・10、大地屋書房）所収の佐藤春夫序文および『佐藤春夫詩集鑑賞佐久の草笛』（昭49・12、學燈社）の「著者略歴」に拠った。

凡例

- 〔 〕 抹消箇所
- 〔 〕 および傍線部 挿入箇所
- 判読不能 □ 囲いの文字は、不明瞭（推定） 箇所

佐藤春夫創作ノート・内容一覧

頁	内 容	初 出	初 収
表紙	メモ	-	-
1	漢詩人メモ	-	-
2・3	「浅間の噴火を見て」稿	未詳	『まゆみ抄』昭23・11 信修社
4・5	「長男歩む」稿	未詳	『抒情新集』昭24・6 好学社
5	「歎息」稿	未詳	全集未収録
6	「戸隠」A稿	未詳	『まゆみ抄』昭23・11 信修社
7	「戸隠」B稿	未詳	『まゆみ抄』昭23・11 信修社
8・9	「野のうた」A稿	『令女界』昭23・2	『抒情新集』昭24・6 好学社
10	「野のうた」B稿	『令女界』昭23・2	『抒情新集』昭24・6 好学社
11	「野のうた」C稿	『令女界』昭23・2	『抒情新集』昭24・6 好学社
12・13	「妖獣」A稿・B稿	未詳	全集未収録
13	「さまざまのうた」A稿	未詳	全集未収録
14	「望郷五月歌」一節（メモ）	『婦人公論』昭6・6	『閑談半日』昭9・7 白水社
16	「さまざまのうた」B稿	未詳	全集未収録
17・18・19	「木曾の秋」稿	未詳	『まゆみ抄』昭23・11 信修社
20	メモ	-	-
21	「野にうたふ歌」一節	『別冊文藝春秋』昭23・10	『抒情新集』昭24・6 好学社
28・29	「山中望郷曲」A稿	『令女界』昭23・4	『抒情新集』昭24・6 好学社
30・31	「山中望郷曲」B稿	『令女界』昭23・4	『抒情新集』昭24・6 好学社
32	「野のうた」D稿	『令女界』昭23・2	『抒情新集』昭24・6 好学社
33	「野のうた」E稿	『令女界』昭23・2	『抒情新集』昭24・6 好学社
48	「日が暮れる」異稿か	〔佐々木英之助宛書簡〕	全集未収録
53	間取図か	-	-
55	人名メモ	-	-
56	地図メモ	-	-
裏表紙	メモ	-	-



【表紙】

□□の無意識に注意したのは（※以下手擦れにより判読不能）

活気あり、二階なきも氣づかず、浅草の新□店（附近）通を思ひ出させる
 □□として□を上げるため
 新開地とよりは□□の界限

新宿區下落合

□する代には□□□□□□□□

【裏表紙】

バス時「刻」間表

〔ミヨタ發〕

七時	六時40
八時四分	八時40
十一時五	十時15
十三五〇	十三時50
十五四〇	十五時325
十七三〇	十七時10
岩代田發	岩村田發
御代田發	御代田行

ササマ

腰辨當

四十分

ミヨタ發

有明の頂點「智恵の相者」（はわれを見て）
 に上昇する過程の間にある「朝なり」や
 「朱のまだら」などに鷗外の「影を見る」
 「見ては」おもかげのぞき出てゐるのを

十一時八分

自分は見える。風 その「物」象の「把」を把握する方法の

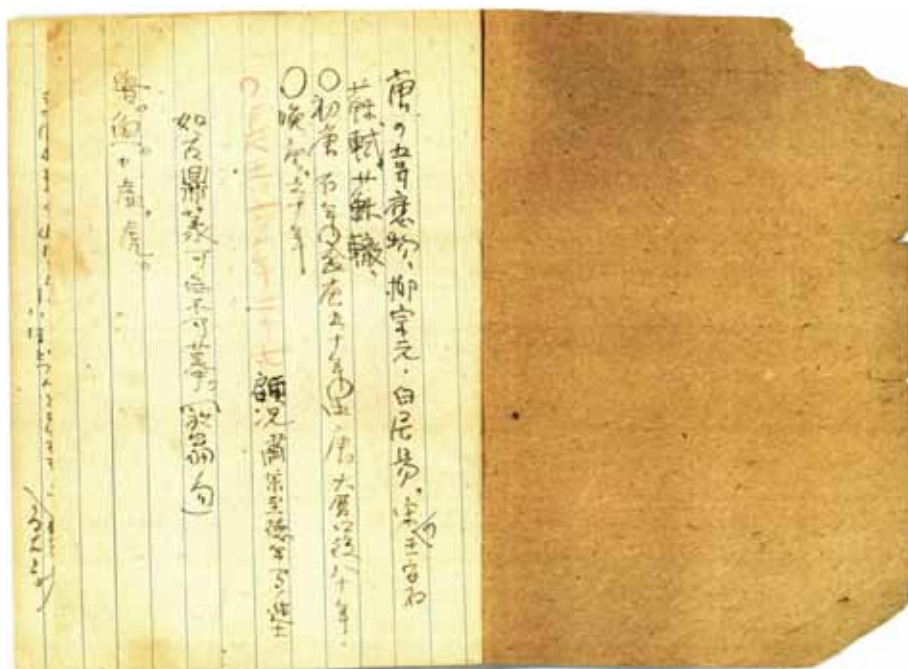
十三時十一分

寫）や心理（の）の

十一時五〇分

友
 のかけ
 辛夷

佐藤春夫



【表見返し】

(※空白)

二

唐の韋應物、柳宗元・白居易、宋の王安石

蘇軾、蘇轍

○初唐 百年○盛唐五十年○中唐大曆以後八十年

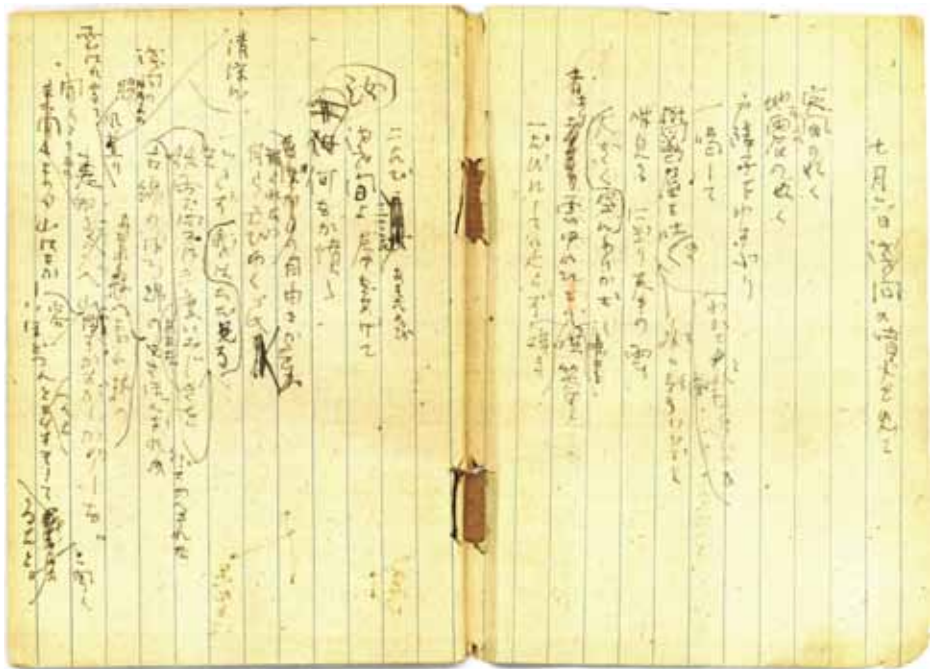
○晩唐六十年

○長吉享年二十七 顧況肅宗至德年間ノ進士

如古鼎篆可愛不可摹。(放翁ノ句)

魯。魚。虚。虎。

(※この頁「長吉享年二十七」のみ赤鉛筆)



【二】

七月六日浅間の噴火を見て

突風の如く
地震なみの如く

戸障子をゆすぶり

一喝して

鬱屈を吐き「く」

唯見る にぎり拳の雲

「外とに「立ち」駆けいでて」

者あり「者あり」雲中にひとり

一たびにして足らず

【三】

二たび「三たび」三たびあまたたび

浅間よ 拳をあげて

汝「汝」「何」何をか憤る

「名ばかりの」誤られたる自由をか

自ら亡びゆく民「をか」をか

清涼に

知らず「我はただ見る」

妖雲空に三度いみじきを

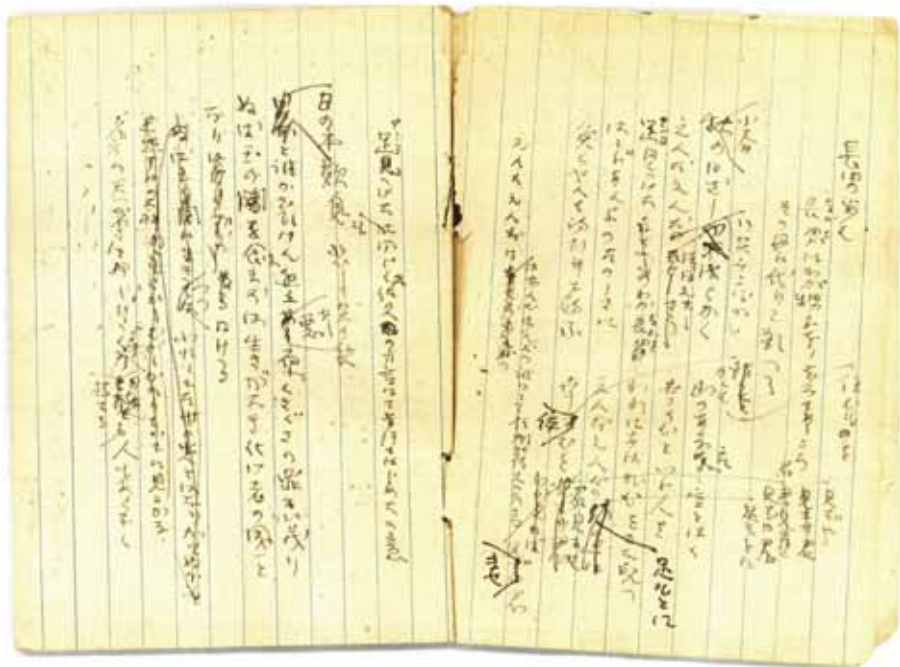
浅間の腸

雲はれゆきて風薫り

「また」知るこの夕べ山「は」容いとすがすがしかりしを。

聞くこの日の

「また聞くこの」夕山はをかしいほどつんととりすまして「静かであ」みたと聞く



【四】

長男歩む

長男ながをはわが甥なまなり歩みそめしころ
その母に代りて歌へる

君

見みずや
見みませ君
見みずや君

住むものを

小春

に笑みこぼれ

「限りなく」かくも

足もとに

〔秋〕の日ざし「のや」やはらかに

山やまのあな「た」たの空とほく

足もとに

足見つけた「赤ちゃんの」わか長男

われはあはれむをさな兒の

はこぶあんよのたのしさに

えんだえんだの細道ほそみちに

住

幸さい「す」むを見ませ君 君見ませ

えんだえんだは「歩んだ歩んだの」

「わが見れば」

【五】

足見つけた「は」も同じく北佐久〔□〕の方言にて歩行をはじめたの意

歎息 悲しき笑の歌

日の本

悪あく

〔日の本〕と誰か云ひけん豊「あし」原くさぐさの罪生ひ茂り

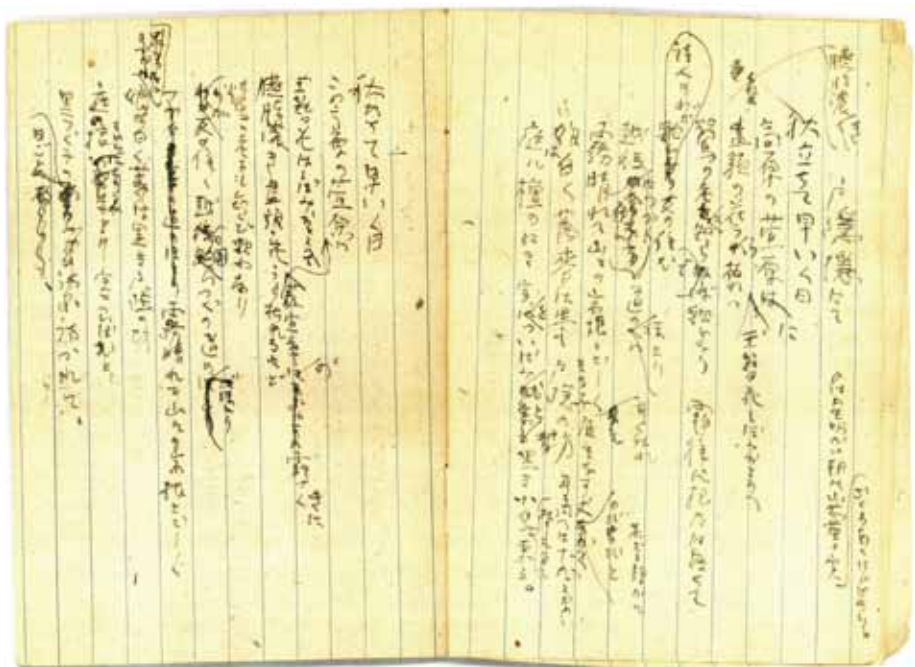
ぬば玉の闇を食はますは生きがたき化け者の國と

なり「にけらずや」「ぬる」にける

〔ぬば玉の闇に生き「ては」つつ われもまた世の光とはなりかてぬかも〕

〔天照す日の大神のこもらひしむかしかたりもいまに見るかな〕

久方の天つ岩戸を押しひらく手力「を持てる」〔のあ〕持てる人もあらず



【六】

臙脂濃き

戸〔隠〕隠にて

夕は星明かに朝は山芍薬の實

〔ざくろの如くはじけたり〕

秋立ちて早いく日

〔くれな〕

高原の萱原〔は〕に

玉簪花しほみおとろへ

〔色〕

晝顔の花う〔れ〕ら枯れつ

鶯の老〔を〕も知ら〔ねば〕で歌ふなり 霧柱に根太は落ちて

詩人のわが〔歌ふなり〕友の住む

越後〔にへのみち〕〔につづく〕通ふ道の〔べに〕ほとり

霧晴れて山々の岩根こごしく〔見え〕あらはれ

娘は白く蕎麥は黒し戸隠の坊

〔枝をしなはせて〕

庭に檀の紅き實〔は〕をついばみ〔に來る〕むと黒き小鳥來る。

〔※下部余白〕

足おと静かに

その子麻生なす丈〔たかく〕のびのびと

年を問へば十九とかや

【七】

秋たちて早いく日

この高原の萱原に

玉簪花はしほみおとろへて 藪萱草〔は〕の〔あぎやかに〕露け〔く〕きに

臙脂濃き晝顔の花うら枯れるれど

鶯の老をも知らで歌ふなり

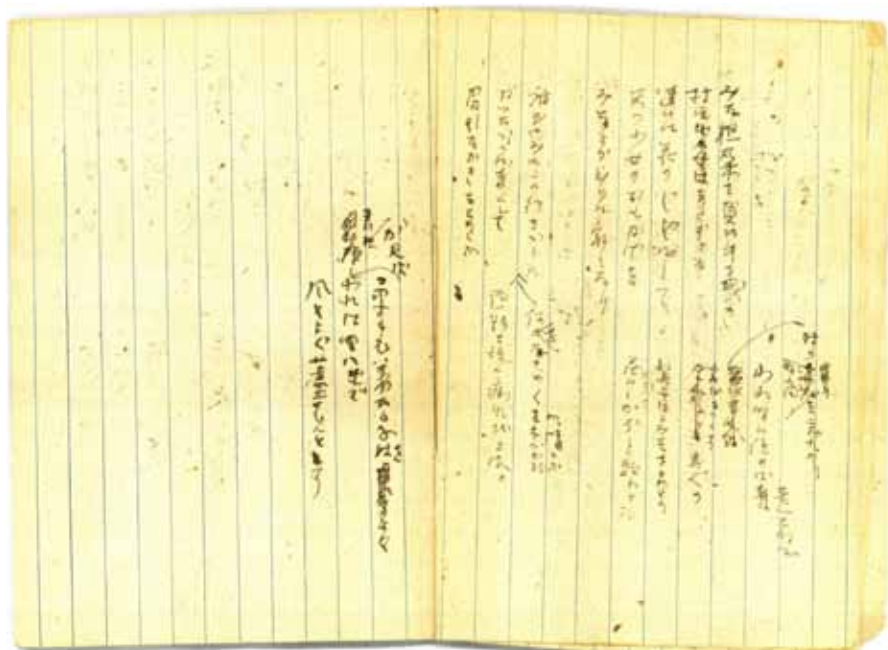
〔わが〕わが友の住く越〔後路〕の國につづく道の〔ほとり〕〔べ〕ほとり

〔つづく〕の道のほとり 霧晴れて山々の岩根こごしく

〔足音しづか〕〔に〕なる 娘は白く蕎麥は黒き戸隠の坊

庭の檀〔の〕〔の〕〔の〕に赤らみそめし實をついばむと

黒つぐみの〔訪ぶ〕 日ごと□□して〔つがひ訪ふ〕訪づれて。



【八】

みな粗朶を負ひ牛を曳き
村に少女はあらずとも
道には花のしじにして
天つ少女のおもかけを
みなとりどりに宿したり

時の「みやび」「はやり」このよ好尚を忘れたり
われ野に住めば「老い」老いたれば
「老いたれば」

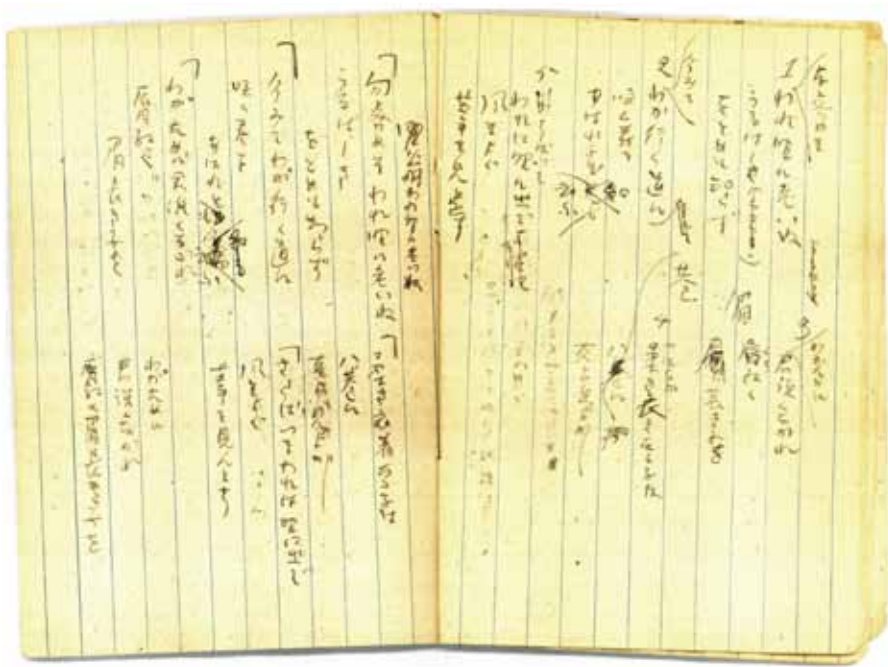
「かく歌ふとも」みやびをつくす若人の
われなにくみをとめこの
花にしかずと歌ふとも

誰ぞやみやこの行きずりに
口いたづらに赤くして
眉引なかきをとめらが

何「か」をなまめく「まなづかひ」風情とか
面影を説く痴れびとは。

【九】

が見ば
「目に疎」君「は」
柔き衣着たる子「は」を「目にうとく」
われは野に出で
風そよぐ蘆を見とす



【一〇】

〔な咎めそ〕 〔うるはしき〕

1 われ野に老いぬ

うるはしき〔なさけある〕

をとめも知らず

2 わか行く道に

咲く花を

〔知〕

あはれとぞ

〔見る〕

5 〔い〕〔さ〕らばいま

われは野に出で〔古沼に〕

風そよぐ

葦を見ととす

【一一】

〔野翁〕われ野に老いぬ

〔勿咎めそ〕 われ野に老いぬ

うるはしき

をとめも知らず

〔イみてわが行く道に

咲く花を

あはれと〔も〕も〔知る〕

〔わがために君説くなかれ

脣紅く

眉長き子を

〔わかために〕

3 君説くなかれ

脣紅く

〔眉〕長き子を

巷

4 〔柔〕〔衣〕きたる子は

八巷に

友よ見よかし

〔柔〕〔衣〕きたる子は

八巷に

友よ見よかし

〔さらばいまわれは野に出で

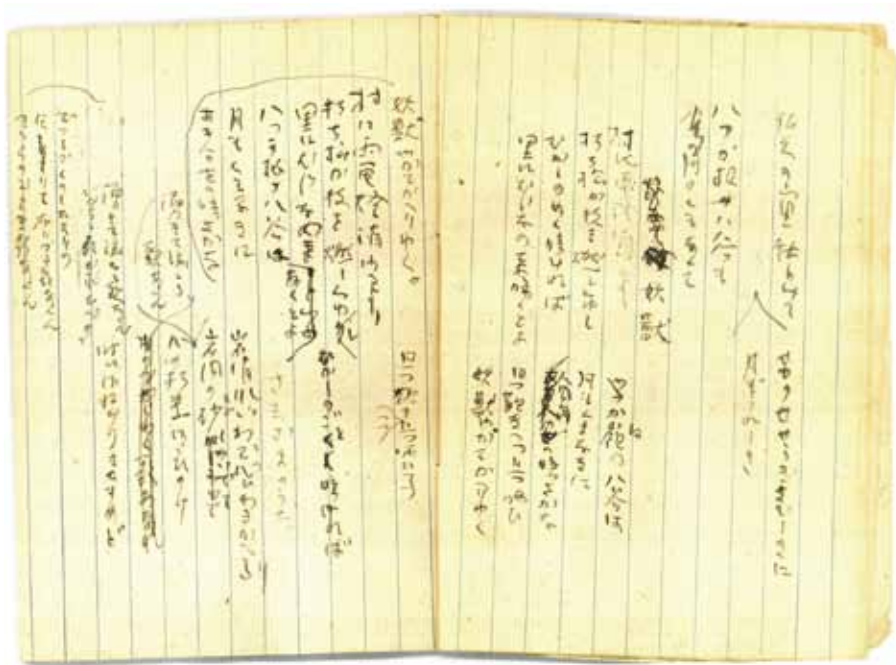
風そよぐ

葦を見んとす

わがために

君説くなかれ

脣紅く眉長き子を



〔二〕

佐久の山里秋ふけて

八つが根の八谷も

〔八つ〕月のくまなくて

せせのせせらぎさむしきに
月ぞうれしき

〔節電怪〕妖獣

村に電燈消ゆるより

打ち松が枝を燃しくゆし

むかしの如く暗ければ

里にむじなの來啼くとよ

やつか嶺の八谷は

月もくまなきに

〔ああ人の世の〕人間界の暗さかな

且つ歎きつつ且つ晒ひ

妖獣やがてかへりゆく

〔三〕

妖獣やがてかへりゆく。

村に電燈消ゆるより

打ち松か枝を燃しくゆ〔り〕し

里はむじなの來〔るといふ〕なくとよ

八つが根の八谷は

月もくまなきに

ああ人の世の暗さかな

且つ歎きつつ且晒ひつつ

むかしのご〔く〕とく暗ければ

さまざまのうた

さまざまのうた

岩清水いわで心にわかかへ〔る〕り

岩間の砂〔にしみいで〕しみいでて

心の朽葉はらひのけ

〔おのづからわく歌あなれ〕

時にはにこりまたすめど

湧きて流るる

歌あらん

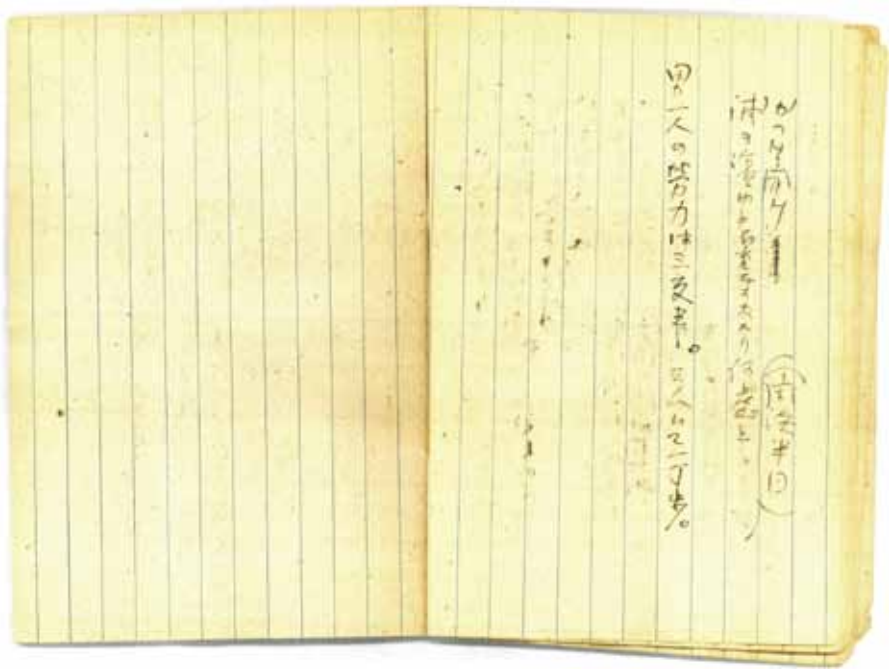
湧きて流るる歌ならで

いかなる歌か求むべき

〔て〕つしづくのしたたりの

□□□てりてなりつる歌あらん

つららのごとき歌あらん



【一四】

かつは聞け「――」
 浦の濱ゆふ□重なすあたり何處と
 (閑談半日)

男一人の勞力は三反半。三人にて一丁歩。

【一五】

(※空白)



【一六】

或は新らしきをもたらし

〔或は〕**傳**ふべきを傳へぬ

或は**大**きと守りつづけて

或は岩清水湧くか如く歌ひ

或はつららのこほるか如く歌ひぬ

【一七】

馬籠まごめの〔宿〕しゆく秋

これわかかくのワイマアル

大人おとなかものせし筆のあと

夢のあとまた足のあと

遺れる路や杜や空

かなたの峠とがここの坂

目路に重なる「夕日ゆふひかかよう」尾根平

大人をおもへばものとして

歌ならざるはなかりけり

ことほりなれやふるさとの

友よりつどひ大人がため

土かたみおしならし石を据え

記念の家を築きたる

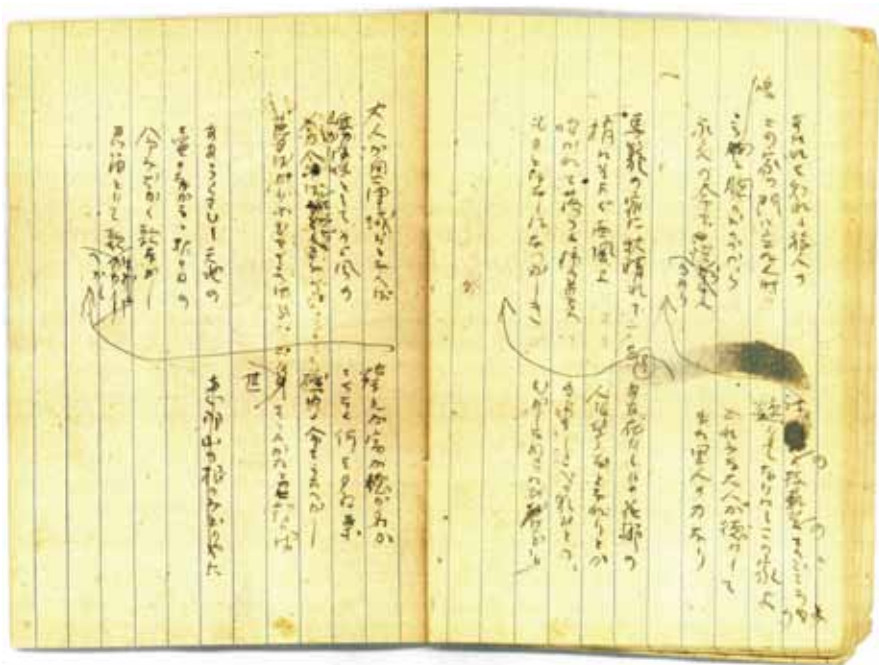
月日は流れ星うつり

世は變るともこの家の

新らしき窓とこしへに

〔□□〕理想の天と地に「のぞみ」〔む〕

展} ひらく



【二八】

鳴

あはれを知れる旅人の
この家の門に立たん時
高〔胸〕る胸のおのづから
永久の命を悟〔り〕ら〔なん〕

馬籠の宿に秋晴れて

梢にそよぐ西風よ

吹かれて落つる柿の葉よ

ものとはなしになつかしき

を□

ああ在りし日の花櫛の

人もおうなとなれりとか

きよきしらべの歌ひとつ

むかしなからにひびけども

詩〔よ〕技藝〔よ〕まごころ〔の〕の
凝りてなりにしこの家よ
これみな大人が徳にして
また里人の力なり

【二九】

大人が奥津城おとなへば

〔丘のふもと〕山かげにしてそよ風の

人の命は〔みどり〕もみぢ葉の

夢ばかりとぞをしへける

ああうらさむし天地の

壺のなかなる秋の日の

命みぢかく歌ながし

君笛とりて歌〔へかし〕〔はずや〕

へかし

榮えか富か徳か名か

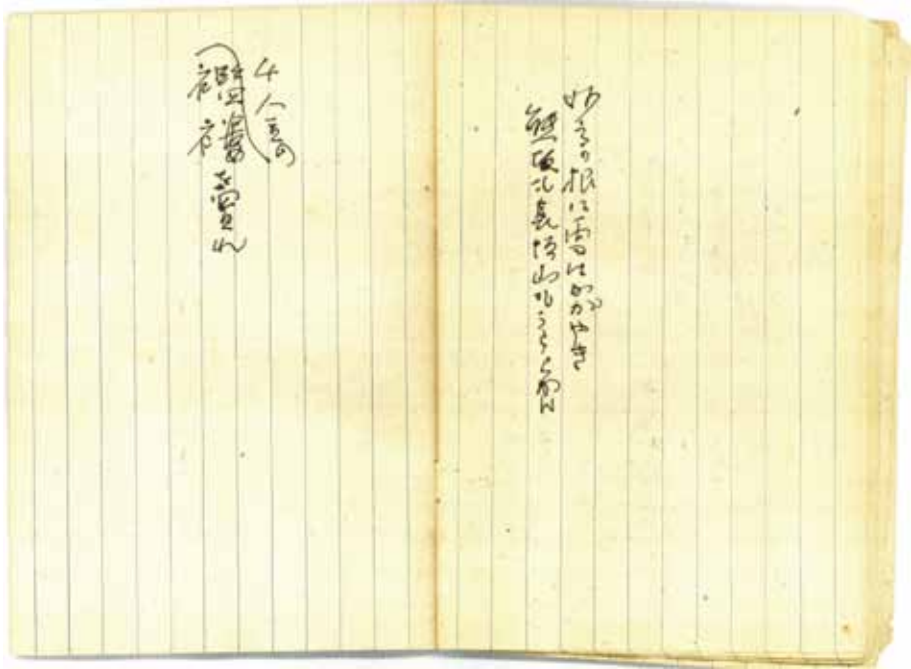
こちたく何を夕紅葉

燃ゆる命をうたへかし

〔身〕をうたかたと君知らば

世}

〔恵那山の根のみどりやに〕



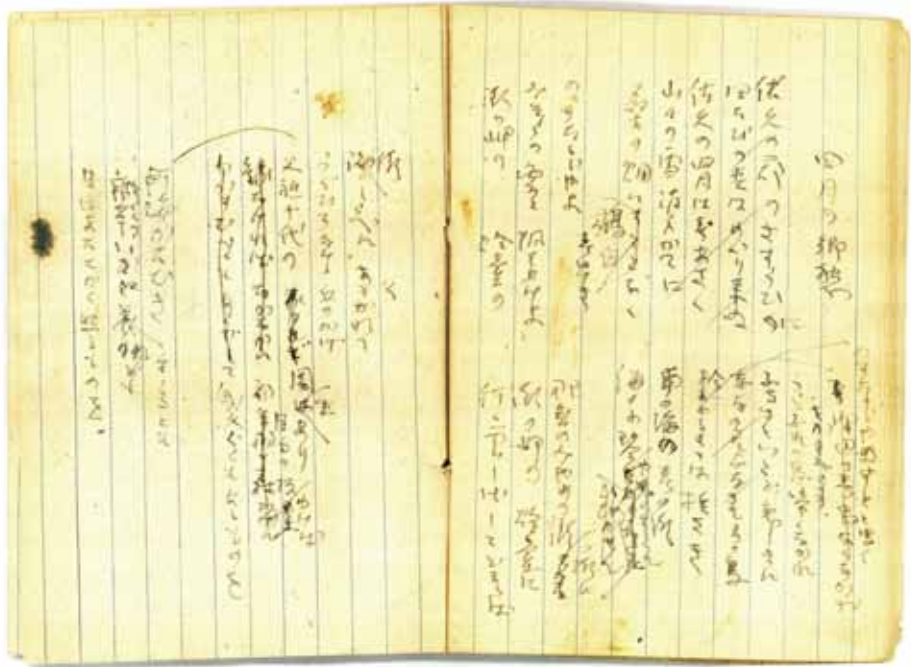
【110】

妙高の根に雪はかがやき
 熊坂も長坂山もうらかに

【111】

千金の
 襦袢を賣れ

（※一二二頁より二七頁まで空白）



【二八】

四月の郷愁

のすたるじや「よ」のすと鳴く

〔春〕〔野邊の春鳥なくなかれ〕

〔をかきならす〕

うらふれの鳥啼くなかれ

ふるさといとど戀しきに

ななきそななきそ春の鳥

〔ああ〕今ふるさとは椿さき

南の海〔に〕の春の潮

海の小琴〔をかきならす〕や鳴らすらん

〔ひびかせん〕

那智のみやまの瀧〔の音〕つ瀬に

潮の岬の 燈臺に

行く雲しばしとどまらば

春早き

のすたるじやよ

みそらの雲と 帆を上げよ

潮の岬の 燈臺の

【二九】

〔潮〕

海のしらべに あ〔こ〕がれて

うぐひすなける 丘のかけ

父祖十代の 〔家なれど〕

〔縁なければなかなかに〕

〔わがすむべくもあらずして〕

〔く〕

〔生〕

園〔は〕あり

都〔音羽の森かけに〕 目白の坂〔の上〕

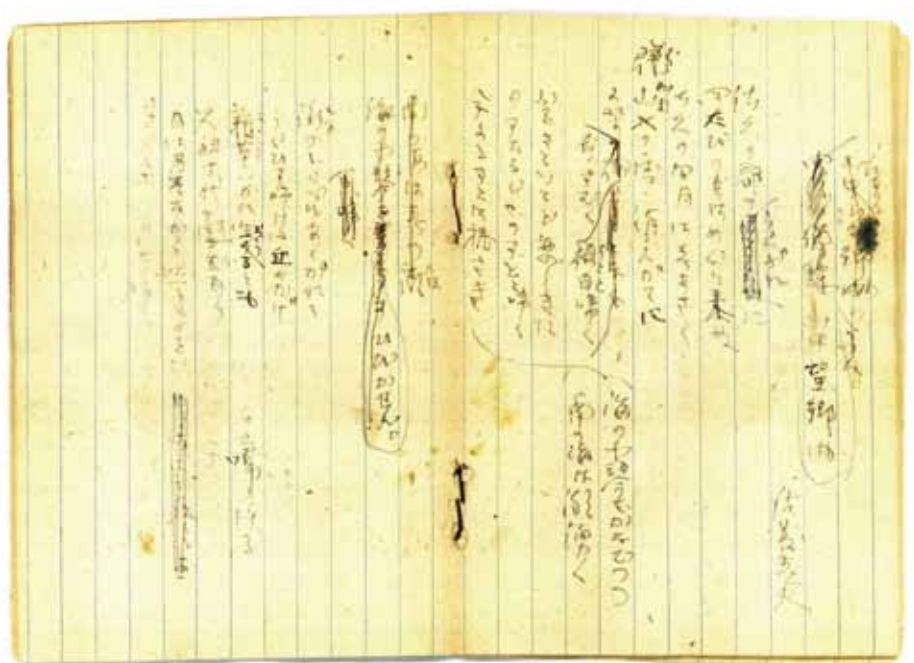
〔ゆけば〕

我文ぐらもあるものを

軒端かたむき

雑草い〔かに〕とど〔茂れども〕

日はあたたかく照るものを。



【三〇】

にありて

〔山中望郷〕〔曲〕のうた。

〔四月の郷愁〕〔山中望郷曲〕

佐藤春夫

佐久の郡の「さすらひ」うらぶれに

四たびの春はめぐり來ぬ

佐久の四月は春あさく

群山〔々〕の雪消えがてに

桑〔の畑にすたとなく〕

原さむく頬白啼く

ふるさといとど戀しきに

のすたるじやのすとと啼く

今ふるさとは椿さき

海の小琴をかなでつつ
南の海は潮湧く

【三一】

〔南の海は春の潮〕

〔海の小琴を「かきならす」〕〔ひびかせん。〕

〔鳥啼く〕

潮のしらべにあくがれて

うぐひす啼ける丘のかげ

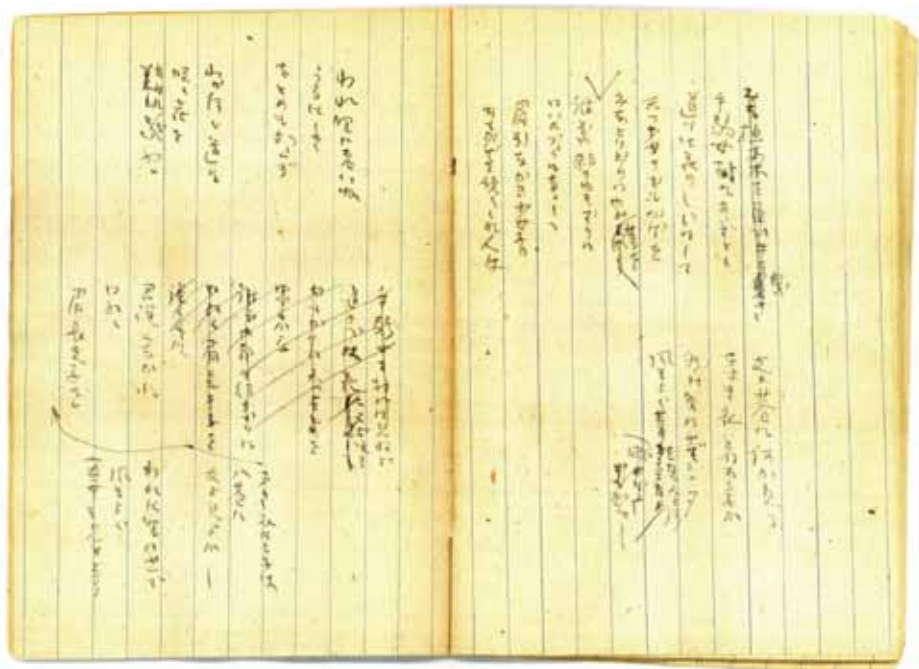
雑草いかに生〔う〕うるとも

父祖十代の園生あり

啼ける

日はあたたかく照るものを。

〔日はなごやかに流るるを〕



【三二】

〔みな粗朶を負ひ牛を〔負〕曳き〕 友よ巷に何か見る

手弱女村にあらざとも 柔き衣着たる子か

道には花のしじにして 我は野に出でこの夕

天つ少女のおもかげを 風そよぐ葦〔をこそ見め〕を見んとす

みなとりどりにやど〔したり〕せるを 〔眺めばや□□むべし〕

誰ぞや都のゆきずりに

口いたづらに赤くして

眉引きなかさ少女子の

おもかげを説くしれ人は

【三三】

〔手弱女を村には見ねど〕

〔道のべは花〔しじにして〕ここだ咲き〕

〔おもかげに天つをとめを〕

〔思ふかな〕

〔誰ぞや都の行きずりに〕

〔口紅く眉長き子を〕

〔説く人は〕

君説くなかれ

口紅く

眉長き子を

柔き衣たる子は
八巷に
友よ見よかし

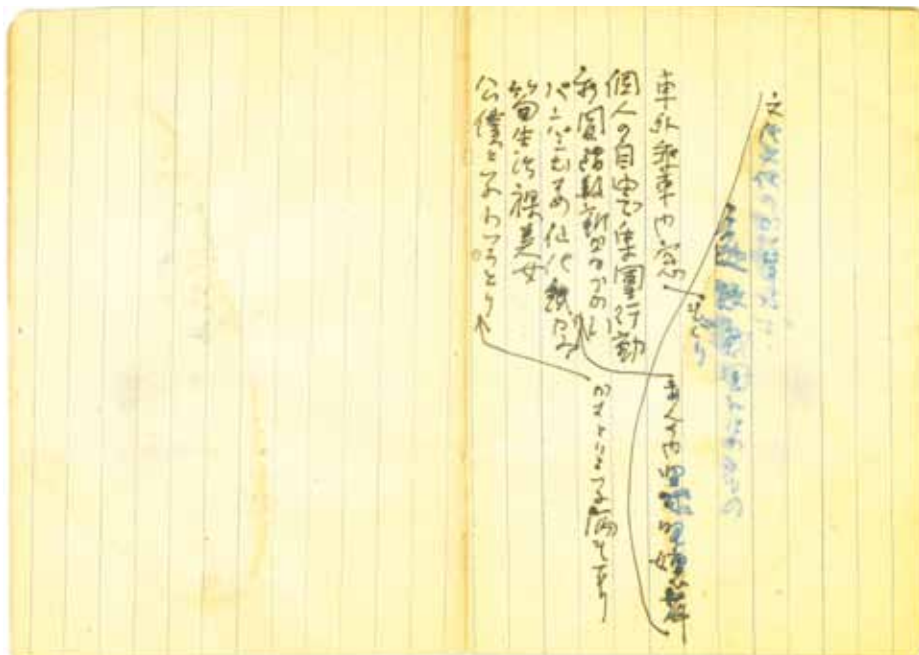
われは野に出で
風そよぐ
葦を見ととす

〔美し〕あはれとぞいふ

咲く花を

わが行く道に

(※三四頁より四七頁まで空白)



【四八】

文化文化のかけ聲〔に〕で
〔この頃〕敗戦國にはやるもの

もぐり

あんちや野球野嬢舞

車外乗車や窓

個人の自由で集團行動

新圓階級新かなづかひ

パンパンむすめ仙化〔紙〕がみ

筒生活裸美女

公僕といふわいろとり

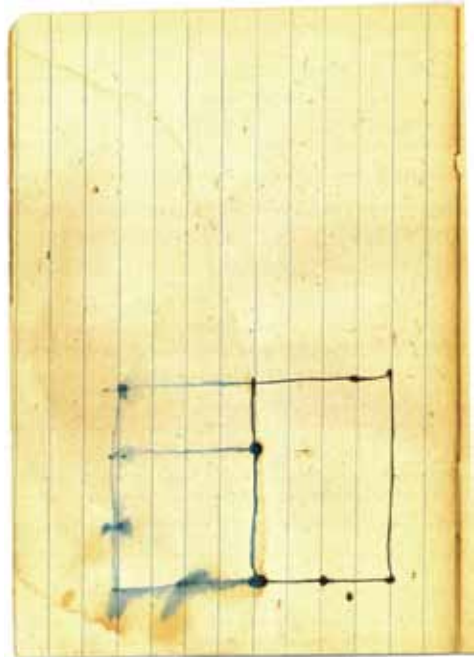
かすとりといふ酒もあり

【四九】

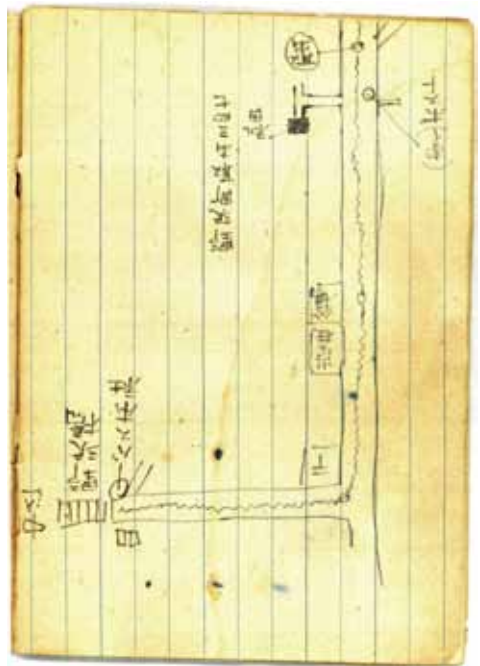
（※空白）



【五五】



【五三】



【五六】

(※五七・五八頁は切り取り。五九・六〇頁および裏見返しは空白)

〔付記〕

今回の資料公開にあたっては、新宮市立佐藤春夫記念館に御許可いただきました。この場をお借りして謹んで御礼申し上げます。なお、本研究は、平成二三年度科学研究費補助金・若手研究（B）の助成を受けております。